

第2回『まちづくり』に関する提案

『美しいむらづくり』

農業行政は、農家などの生産者重視から消費者重視へと転換しつつある。

そこにあるのは、食料の生産が農村のすべてであるという考え方を改め、都市の消費者の要望を汲みいれるとともに、農村・漁村そのものに豊かな自然と古い歴史・文化があり、これらの資源は貴重であるという原点に立つ想いである。

都市住民にとっても、自然や文化に触れ合うことにより、心の豊かさを取り戻す機会にもなる。

水・緑・文化などを活かした景観に加え、農村・漁村を一体的にとらえた環境・生態系の保全を目的にした『美しいむらづくり』を考える。このポイントは、都市住民を巻き込んだ『むらづくり』にある。

『美しいむらづくり』では、都市住民との触れ合いの場、たとえば市民農園や生態観察パーク、せせらぎ広場などの交流施設を整備する。

そして、触れ合いの機会を増やすための手段が、インターネットによる都市への情報提供である。

どこに行けばどういう自然と触れ合うことができるのか、どこの村にはどういう特産品があるかという情報を、インターネットを通じて提供する。また、交通情報も流し、わかりやすい村へのアクセス方法も知らせるようにする。

もちろん、『美しいむらづくり』では、インターネットなどのソフト面の情報整備を図るのみならず、集落排水事業として下水道基盤も整備する。また、農道や林道などの交通手段も特に重点的に整備する。

なかでも、集落排水事業として新たに農村地域に張り巡らされる下水道管にあらかじめ光ファイバーを敷設すれば、田園地域も一挙に情報の高速化(マルチ田園構想)が推進されるだろう。

このように、歴史と文化が豊かな「美しいむら」を保存しながら、高度情報化を進める。
具体的な提案として

都市住民を意識し、「農村・漁村でたのしむゆとりある休暇」を過ごしてもらおうという「グリーン・ツーリズム」活動を行う。

平成14年度から始まった学校の完全週休2日制を迎え、学童を対象とした農村・漁村での長期滞在型の体験活動の計画も推進する。

都市に住んでる人皆が、一人あたりいくら、と定めたお金を集め、『美しいむらづくり』、特に環境整備に活かしていく。

お金を支払った都市住民は、2~3年一度、むらを訪れ、その地で作られた特産品

等を受け取る

過疎化で荒廃しつつあったふるさとは都市住民の後押しで美しくよみがえるか、注目したい。